



堀船中だより

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標

自ら学び 自ら考え 自ら行動できる生徒

《70周年記念 運動会みなさん、よく頑張りました!》

6月1日(土)70周年記念運動会を北区立北グランドで行ないました。

「軌跡 70th Anniversasry ~みんなで Fly High~」をスローガンに掲げ、初めて使用する北区立北運動場で、グランドコンディションを考え、大幅に競技順を変更して、全ての競技を無事終えることができました。運動会予行も、前日の雨でグランドコンディションが悪くできませんでした。運動会前日も雨が降り、本来であればグランドの使用を中止せざるうえない状況でしたが、北運動場の皆様の特別なご配慮のもと使用を許可していただきました。これもPTAや地域の皆さまのご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

前日、大勢の堀船中教職員で、グランドに溜まった雨水をスポンジで吸い取る作業を泥だらけになりながら行いましたが、また夜中から朝にかけて雨が降り、どうになってしまうのかと、不安な気持ちで、泥水を乾かす対策を続けました。

前日の様子からも走る競技は、まず不可能であると言われておりましたが、当日は、体育科の先生の冷静で的確な判断でプログラムを大幅に変更して、泥を乾かす作業を続けながら行いました。

子どもたちが、本格的な運動会の練習ができない中、自分たちで考え、行動して、どんな状況にあっても、70周年記念運動会を成功させるのだという強い思いで、空腹にもかかわらず、全ての競技を楽しみながら一生懸命頑張っている姿に感動しました。

この運動会を通して、70年という長きにわたる良き伝統と歴史が、どんな逆境にもたち向かえるたくましい堀船中生を作り上げてくれているのだと改めて感じました。

413名もの皆様にご来場いただきまして子どもたちの活躍する姿を最後まで見ていただけて、本当に素晴らしい一日になりました。終了時刻は、14時00分を過ぎており、ご来賓も、保護者の方々も、食事も取れず大変申し訳ございませんでした。

最後になりましたが、運動会開催に当たり、保護者の皆さま、地域の皆さまのご理解・ご協力をいただきましたこと、そして都の北学園の校長先生を始め職員の皆さまに様々な面で、ご支援・ご協力いただきましたことを心より感謝申し上げます。



《3組 地域の名所めぐりを行いました。》

6月21日 8時40分から3組のみなさんは、地域の名所めぐりを行いました。

あいにくのお天気でしたが、みんな元気に歩いて見学しました。

見学コースは、学校→名主の滝→王子稲荷神社→音無川親水公園→王子神社→旧大蔵省醸造試験所第一工場(深谷のレンガ)→飛鳥山博物館→渋沢史料館→晩香廬(ばんこうろ)→青淵文庫(せいえんぶんこ)→王子駅南口ロータリー～バス～学校

途中豪雨にあたりして、大変でしたが、最後までしっかり学習をして、本当に立派でした。3組のみなさん、本当にお疲れ様でした。



《祝 野球部 北区夏季大会 第3位おめでとうございます。》

野球部夏季大会は1回戦を順当に勝ち進み、2回戦 6月8日(土曜日)2回戦が13時から、新荒川大橋野球場で行われました。投手戦となり引き締まる試合が続ぎ、1対1の同点で延長を迎え、見事、3対2で勝利しました。6月16日(日曜日)準決勝戦が浮間グランドで行われ、滝野川紅葉中と対戦しました。結果は、残念ながら負けてしまいましたが、北区第3位という立派な成績をおさめました。

本当におめでとうございます。たくさんの保護者の皆さまに応援にかけつけてくださりまして本当にありがとうございました。



《祝 祝 3年生 樋口さん バレーボール優秀選手賞おめでとうございます。》

3年生の 樋口さんが、北区中学校体育会バレーボール部より優秀選手賞を授与しました。本当におめでとうございます。



津田梅子の生き方（14） ～ 梅子の闘病と死～【最終号】

梅子は 1917(大正 6)年の春ごろから体調を崩して入院します。2 か月後に退院したものの、その後も入院と退院を繰り返しました。3 度の入院を経て、これ以上塾長を務めることが難しいと自覚した梅子は、1919(大正 8)年の 1 月に社員会に辞意表明の手紙を寄せると、同年 2 月には辻マツが塾長代理に就任したことで、梅子は塾長としての実質的な活動を終えたのです。

その年の 10 月ごろ、親戚一同の計画で建てられた北品川御殿山(現:東京都品川御殿山の付近)の住居が完成したため、4 度目の入院を終えた梅子はここに移り住むと、それから以後 10 年間を過ごしました。

一方で、梅子が実質的に塾長を退いた後の女子英学塾は、1923(大正 12)年の関東大震災に伴う大火災によって、東京市中心部に位置する麹町区五番町の校舎が全焼してしまいます。梅子が目指していた女子大学の設立どころか、塾の存続すら危ぶまれる窮境に陥りました。

この危機に際して、梅子に代わってとある人物が奮起します。それは、既に 63 歳になっていたアナ・ハーツホンでした。アナは急遽アメリカに帰国すると、自ら先頭に立って募金活動を展開しました。数年間に渡るアナの献身的な努力により、塾は目標金額を超える 100 万円の資金を得ると、塾の復興と小平キャンパスの建設を果たしたのです。



アナ・ハーツホン

【提供】津田塾大学津田梅子資料室



梅子が晩年過ごした別荘があった場所 現在鎌倉市稲村ガ崎

1928(昭和 3)年、梅子は昭和天皇即位の大典に際して勲五等に叙され、瑞宝章を授けられました。また、翌年からは、さらに養生できるようにと鎌倉の別荘に移り住みます。しかし、梅子の病状は悪化の一途を辿りました。関東大震災から 6 年後の 1929(昭和 4)年 8 月 16 日、梅子は鎌倉の別荘で脳出血のために亡くなりました。享年 64 歳(満年齢)でした。梅子は、アナをはじめ多くの人々の支援によってできた小平キャンパスの完成を見ることが叶わずに、その生涯をとげました。

梅子の葬儀は、東京市麹町区五番町の女子英学塾講堂での校葬(キリスト教式)として行われると、会葬者は約 1 千人にも上り、昭和天皇と皇后からは祭祀金一封が下賜されました。

1931(昭和 6)年、女子英学塾は、東京府北多摩郡小平村(現在の東京都小平市)に移転しました。新しい校舎が完成したのです。本館はアナの功績を讃えて後年「ハーツホン・ホール」と名付けられました。梅子の墓所は敷地内に移されて、今も津田塾生を見守っています。

梅子の死去から 4 年が過ぎた 1933(昭和 8)年に、女子英学塾は梅子を記念して校名を「津田英学塾」に改めて新たなスタートをきりました。太平洋戦争の最中である 1943(昭和 18)年 1 月には「津田塾専門学校」と改称し、終戦後の 1948(昭和 23)年 3 月には「津田塾大学」となりました。現在に至るまで多くの優秀な卒業生を輩出している津田塾大学で、梅子の志は生き続けています。

※※※

さて、ここからは筆者(阿久津)が参加したシンポジウムのレポートを掲載させていただきます。

令和 6 年 4 月 26 日(土)、東京ウィメンズプラザホールにて「新札記念津田梅子シンポジウム～女性先駆者津田梅子の軌跡～」が開催されたため、聴講させていただきました。

津田塾大学学長 高橋裕子様、一般財団法人新渡戸基金理事長 藤井茂様、一般社団法人日米協会副会長で山川捨松ひ孫の久野明子様、津田仙研究者津田仙ひ孫の津田道夫様がパネリストとして登壇し、貴重なお話をしてくださいました。

それぞれの道で活躍する見識の高い方々のお話が聴けることを大変有難く感じながら、私は中でもとりわけ津田塾大学学長の高橋裕子様のお話に感銘を受けました。以降、高橋学長のお話の一部を紹介させていただきます。

「21 世紀になった今でも連綿と続く津田塾大学の近代女子高等教育ですが、なぜこの事業をここまで継続できたのでしょうか。それは、プリンマー大学留学時の梅子が、寄付母体をかため、8,000 ドルにも及ぶ次世代のための募金支援を集めて、日本人女性のための奨学金制度(「日本婦人米国奨学金」委員会)を築いたことにあります。日本で女性が高等教育を受けられなかった時代に、経済的・精神的に自立した女性を増やし、自分一人のことに留まらず、日本という国の発展につなげたいという強い想いが梅子にはありました。そんな梅子の熱意が生んだ奨学金制度が、津田塾大学及び日本の女子教育を導く多くの人材の育成を支え、現在まで続く女子高等教育の源泉となってきたのです。

また、1905(明治 38)年に大山巖伯爵邸で行われた女子英学塾同窓会におけるこんなエピソードがあります。

大山巖伯爵夫人である大山捨松は、女子英学塾で学んだ訳ではありませんが、盟友である梅子のために女子英学塾の同窓会長となりました。「大山巖伯爵夫人」が同窓会長になることで政財界の支援もより大きくなるとともに、捨松の人望により集まったバザーの収益も梅子を支えました。捨松自身は、女性のための学校をつくりたいという夢を抱いて帰国しましたが、大山巖の夫人となる道を選び、自らの手でその夢を果たすことはできませんでした。しかし、大山巖伯爵夫人として女子英学塾の同窓会長となることで梅子を支え、自らの夢を梅子に託したのです。そんな捨松と梅子のコラボレーションによって女子英学塾は誕生し、発展を続けていきました。また、音楽教師としてのキャリアと家庭生活の両立に励んでいた繁子も、梅子のことを人生の最後まで応援しました。岩倉使節団とともに最初の女子留学生として渡米した3人は、それぞれが違った生き方をしましたが、女子英学塾創設によって再び強く結びつき、若き日に夢見た日本の女性が高等教育を受ける時代を共に実現していったのです。

さて、そうして立ち上げた女子英学塾ですが、ようやく軌道に乗り出し、これからという時期に、梅子は長く病に苦しみ、やがて亡くなっていきます。しかしそんな自らの人生を、梅子は手記の中で『一粒の麦』という聖書の言葉に重ねて表しています。

自分自身のことでいつまでもよくよしてはいられない。

一粒の麦は地に落ちて死ななければならない。しかし、もし死んだなら、麦は豊かな実を結び、増えていく。

梅子はそう考えながら、自らの生涯を閉じました。そんな梅子の想いが実を結ぶかのように、女子英学塾に学び、梅子と同じくプリンマー大学に留学した、星野あい、藤田たき、赤松良子など、梅子の後継者達が津田塾大学をしっかりと支えて、今をもって日本のみならず世界で活躍する人物を輩出し続けているのです」

高橋学長が仰っていたように、本校に勤務していた津田塾大学卒の英語科の教員や大学OGの方々にお会いしても、英語はもちろんのこと、道徳心、芸術、自然科学への関心が高く、偏りのない優れた生き方をされていて、まさに梅子の信条である「all-round women」を実践されていることに驚くとともに、梅子の志が今なお確かに受け継がれていることを感じます。

これは、正に高橋学長御自身が40年もの長きに渡り津田梅子について研究され、学長として梅子の意思をしっかりと引き継ぎながらも、時代にあった改革を行いながら経営をされていることの賜であろうと思います。学問に熱心に打ち込む志の高い学生の集う名門女子大学として現在も賞賛される津田塾大学が、道を切り拓く数多くの先駆者を輩出し、学びを社会に還元し続けていることを改めて感じる一日となりました。

最後になりますが、1年3か月にわたる学校だより「津田梅子の生き方」の文章掲載にあたり、多大なる御指導・御協力をいただきました、津田塾大学津田梅子資料室の皆さまに記して感謝申し上げます。



津田塾大学本館（ハーツホン・ホール）

【提供】津田塾大学津田梅子資料室